

それぞれの世界選手権。  
この経験を糧に次なる舞台へ



平成28年度全日本選手権(2017年1月)が終わり、世界選手権の代表が発表された。発表されたリストに、伊藤はシングルス、ダブルスにエントリーされていた。

世界選手権前に、アジア選手権で試合ができ、なおかつ世界選手権で使われる大会球(ニッタク)でプレーできたことが大きかった、と話した。

「早田選手とのダブルスは、1月に発表されましたけれど、実際に練習できたのは2カ月間くらい。ヘアを組む期間が短くて、いきなり試合に臨むのは、難しい部分があります。ただ、アジア選手権という大きな舞台で、世界選手権と同じニッタクボールで試合ができたことで、アジアの選手がどういうプレーをしているのかの情報が手に入りましたし、そして、メダルが取れたことは自信につながりました」

### アジアから世界へ

世界選手権デュッセルドルフ大会の組み合わせは、現地時間の27日に発表された。

「ダブルスに関しては、実際にチャンスがある。チャンスはモノにしないとけない、と思ったのが本音です。ただ、世界選手権は何があるかわからない、ということを経験していたので、気持ちは引き締めていました」

女子ダブルスが始まる。お互いがお互いをフォローし合う内容で、順調に勝ち進み、メダルが確定。準決勝では、丁寧、劉詩雯(中国)と対戦する。試合は接戦となるも、あと1本が取れず、ゲームカウント1対4で敗戦する。

「最初の2ゲームを取れていたらわからなかったです。チャンスはあるな、と感じていました。」

しかし、2本差でリードした場面や、チャンスの時を活かせない。その場面で点数を取れた方が、勝つ、とわかつているのですが、点数が取れない。やはり、精神面、技術面が足りないんですよね」

ただ、普段ならつなぐようなボールを強気にいけたこと、サーブミス、レシーブ、3球目攻撃は通用したことや、試合を最後まで楽しめたことは良かった、と冷静に自分の分析もした。

### 戦術転換。「1本」の重み

伊藤はシングルス4回戦で朱雨玲(中国)と対戦。互角以上のラリー、特にバックハンドのラリーでは伊藤が上回っていたが、ゲームカウント2対4で敗戦してしまふ。

「勝てるチャンスは十分にありました。しかしダブルス同様、最後が取れない、

# 伊藤美誠

ITO H MIMA (スターツSC)

## 2020年へのイメージはできている

2015年の世界選手権蘇州大会に初出場。女子シングルスでベスト8入り。世界に衝撃を与えた。そのまま疾走した伊藤は、リオ五輪出場を達成。さらに成長を遂げた。

リードしていても突き放せないという印象です。本当に中国選手は戦術転換がすごく早く、引き出しがたくさんあるんです。

女子シングルス決勝を見てもそう。丁寧選手は決勝の舞台を何度も経験しているのに対し、朱選手は、経験していない。その差が思い切りの差につながったと思うんです。どちらが勝ってもおかしくない内容でしたけど、丁寧選手の方が、試練を多く乗り越えてきているからこそ、優勝できたんだなと思います」と感想を話す。

### もう怖いチームなんてない

世界で勝つために、今回通用した部分もたくさんあったと話

「攻めて行く姿勢は良かった。特に、中国人選手には攻めて行かないと勝てない。どんどん攻めて行かないといけない。」

ただ、攻めるだけでなく、安定性を高めた攻めをしないと点数が取れないと思います。そこが大きいと思います」

また普通に攻めるだけでなく、自分自身のオリジナリティ、独自の部分の精度をあげるとも話した。

「来年から世界ランキングのシステムも変わります。1試合1試合頑張つて、1つ1つ世界ランクの階段を上がっていききたい。日本選手のレベルが非常に高いので、世界選手権に出るのも難しい。ただその分、切磋琢磨できるし、成長ができる。」

日本選手のレベルが高くなることは、団体戦の時有利。もしかしたら、2020年には、最強のチームができ上がると思うとワクワクしますし、その一人でありたい。」

世界で戦うことを肌で知る。若いうちから刺激を得ることは、実力をつけること、新たな成長をするためには、必要不可欠。2020年まであと3年。伊藤は目標に向かって疾走する。